ニシキキンカメムシをめぐりて（其の二）

高　橋　寿　郎

前回拙文にて新家　勝氏が西宮の尼子谷・夫婦岩にて採集したものがニシキキンカメムシの幼虫ではないかとカラーによる図をつけて送られて来たことを報告した。図の感じからニシキキンカメムシらしいむね報告しておいたがその後新家氏御自身御子息が持って帰られた“森と海と清流の仲間たち”（高知県刊）の中に出ているアカスジキンカメムシの幼虫とは全く違うことからニシキキンカメムシだろうと考えられるとその頁の所とニシキキンカメムシの出ている所をコピーして送って来られた。そして新成虫は５―６月頃に現れるとのことだからその頃尼子谷へ行って見るとお手紙を戴いた。その後５月13日に１度行って見たがそのあたり幼虫を採集した当時と様相が全く変ってしまっており夫婦岩も無くなっていると付近の地図までそえて御送り頂いた。

筆者は本年家庭的事情でフィールドに出るのに制限を受けこの尼子谷への調査は今の所出来ていない何んとか調べたいと気にはかかっているがそのままになっている。

前回の拙文最後に“げんせい”第52、53号誌上にこのニシキキンカメムシの報文があることをかいておいたがもう少し詳しく紹介して見る。第52号の表紙は竹東　正氏による美事なカラーによる本種の図説で飾られ P.17-18 に同じく竹東氏の“ニシキキンカメムシの高知県からの初記録とその飼育”が発表になっている。そして第53号には川沢　哲夫・川村　満・高井　幹夫氏共著になる“四国のキンカメムシ亜科 Scutellerinae カメムシの記録”が発表してあり（P.13-18）p.18に一面カラーで四国のキンカメムシ類が示されている。その中でニシキキンカメムシの幼虫がカラーである。これを見ると新家氏がかいて送って下さった幼虫は正しくニシキキンカメムシであることがはっきりする。

四国でカメムシ類を研究しておられる川沢　哲夫氏が仕事の関係で西宮市に単身赴任と云うことでアパート暮しをしておられるから一度連絡をとって見たらと高知昆虫研究会の事務局の吉永　清夫氏から御教示頂いたので厚顔にも川沢氏にお手紙を差し上げた。折返し川沢氏から論文別刷（カメムシに関しての）とお手紙更には電話を頂いて四国のニシキキンカメムシの情報もお教え頂いた。その上九州の古処山で終令幼虫を採集しそれから産卵飼育して得た標本であると云って２♂１♀をわざわざ送って下さった。生れて始めて手にすることが出来たニシキキンカメムシ美しい恐らく生時はもっと素晴らしいであろうと毎日眺めている（四国での記録は徳島県神山町野間と云うのがあるが若干古い記録で今回のは高知県南国市昆沙門滝付近の庭園樹に 150頭近く見つかったものであると）。

尚前回の拙文を読まれて奥谷　禎一博士からは静岡県下でツゲに大発生して殺虫剤散布が行われた

との御教示を頂いた。同様のことが竹東　正氏の報文（1987）にもある。即ち“長谷川　仁氏からニシキキンカメムシがツゲの栽培地では被害のため薬剤散布をしているとの情報を頂いた”とある（P. 18)。どうもこのカメムシ　ツゲに被害を与えている様で案外といる所には多くいる種のようである。

余談ではあるが始めに一寸紹介して新家　勝氏がわざわざコピーして送って下さった“森と海と清流の仲間たち”その後“日本の生物”7月号（Vol. 4, No.7, 1990）誌上に紹介があったものだから早速高知県国民休暇県局自然保護課へ手紙を出して一冊領けて貰えないかと依頼した所自然保護課の橋本氏から既に本書は領布が終了してしまっておりまた販売はしていないのだが何か役に立つのであればと一冊贈呈するから利用して欲しいと云って送って頂いた。なかなか良い本で土佐の自然ガイドと云ったサブタイトルがついて160p. 全頁カラー印刷で昆虫に就いての写真による紹介が多く土佐を代表する虫たちの姿が美しく大変有益な文献である。わざわざ送って下さった橋本氏の御好意に厚く御礼を申しあげなくてはいけない。

ニシキキンカメムシは兵庫県下には棲息していることは間違いなく再確認を是非したいものだと思い乍らサッパリ成果があがっていない。会員の皆様方にも是非注意して頂きたいものである。

とりとめの無いことを書いたが“ニシキキンカメムシをめぐりて（其の二）”と題してその後の気づいたことをとりまとめておいた。

（追記）最近（X・1990）広島の中村慎吾博士が“帝釈峡昆虫紀（九）ニシキキンカメムシとカメムシの民俗”と云うのを発表になり（帝釈文化　20号：3—10,1990）その別刷を御恵送頂いた。色々とカメムシに関しての有益な解説があり大変参考になる報文である。ただニシキキンカメムシの分布の中に兵庫県が抜けている。兵庫県の記録文献を御存知無いのだと思はれる。

県関係文献紹介

○　兵庫県生物学会但馬支部　　但馬の自然　　（のじぎく文庫）

のじぎく文庫平成元年度配本の一冊と云う形式で出版（1990年4月刊）されたものである（一般書店で1,300円で販売されている）。執筆者は26名で兵庫県生物学会但馬支部のメンバーを主体に但馬むしの会々員の方やその他の方も加わっている。全体のまとめは高橋　匡氏が中心になっているようだ。昆虫関係はチョウの木下賢司氏、トンボ（上田尚志・山崎喜彦氏）甲虫類・セミ・カメムシ類は共に上田尚志氏、アリは滝本恒夫氏（日本蟻類研究会）、水生昆虫は西村　登博士と仲々